

無名草子の小式部内侍評言私注 III

Comments on the Critique of Koshikibu-no-naishi in "Mumyoh Zohshi" III

鈴木弘道

○また、定頼の中納言に、

大江山いくののみの遠ければまだふみも見ず天の橋立
とよみかけたりけるなども、をりにつけては、いとめでたか
りけるとこそおしはからるれ。(拙著『校註 無名草子』八二頁)

「定頼の中納言」は、すでに記したとおり、正しくは「定頼の権中納言」の意で、小式部内侍と深い交渉を持ったが、小式部内侍が定頼に詠みかけたという「大江山」の歌は、前述のごとく、吉田氏(前掲著書)によれば、ほとんど真作と考えられるものの、伝承によって後世に伝えられたようである。そして、この歌を取り上げたり、引歌としてある作品はきわめて多く、吉田氏の前掲著書には(百人一首の注釈関係書は省略する)、「百人秀歌」(二六頁)、「小倉百人一首」の前身「(七一七頁)」、「西遊行囊抄」(一一〇頁)、「閑田耕筆」(一八八頁)、

「和歌故事記(和歌の言葉并故事)〈静嘉堂文庫本〉(一九〇頁)」、「平家物語盛衰記」はにふの物語」「謡曲大江山」「謡曲九世戸」「龍神浦島(番外謡曲)」「謡曲倭国」「謡曲天橋立」「幽霊酒吞童子(番外謡曲)」「あびや節くとき(踊音頭集)」「夜音(音頭集)」「松風村雨束帯鑑 第二」「賀古教信七墓廻 第一」「南総里見八犬伝」伊勢音頭「二見真砂」「箏唄鐘か岬」「うたたねの記」(以上、五〇五―五〇七頁)、「十本扇」(五二八頁)、「梁塵秘抄」、「長門本平家物語」(以上、五五二頁)、「本朝美人鑑」(五五五頁)、「和歌威徳物語」(五五八頁)のほか、金葉集からこの歌が引かれた末に、「俊頼髓脳・袋草紙上・無名草子・十訓抄・古今著聞集・いづみしきふの物かたり・小式部(藤井本)・別本小式部・書写詣(謡曲)・夜の鶴・雑々集・秉燭譚・絵本鶯宿梅・本朝列女伝・丹後名所案内・丹後風土記・大日本史列女伝・前賢故実・列女言行録・本朝古今聞媛略伝・四天王剽盜異録」の作品名が列挙さ

れている(九七六頁)。金葉集二度本(新編国歌大観本)巻第九 雑部上には、

和泉式部保昌にぐして丹後にはべりけるころ、みや
こに歌合侍りけるに、小式部内侍うたよみにとられ
て侍りけるを定頼卿つぼねのかたにまうできて、歌
はいかがせさせ給ふ、丹後へ人はつかはしてけんや、
つかひまうでこずや、いかに心もとなくおぼすらん
など、たはぶれてたちけるをひきとどめてよめる

小式部内侍

五五〇

おほえやまいくののみちのとほければふみもまだみずあ
まのはしだて

とあり、三奏本(新編国歌大観本)にも、ほとんど同様の詞書でこの歌を載せているが、第四句は、いずれも無名草子の場合と異なって、「ふみもまだみず」となっている。しかしながら、山岸徳平氏編『八代集全註』第二巻所収、北村季吟の『八代集抄』下巻では、詞書に大差がなく、第四句は「まだふみも見ず」とあり(国歌大観本も詞書・歌ともにこれとほとんど異同がない)。二度本も「まだふみも見ず」とあるが、三奏本では「ふみもまだみず」となっている。

次に、「大江山」の歌意について記そう。まず、「大江山」は、一つは、京都府加佐郡大江町と京都府与謝郡加悦町との境(丹後国と丹波国との境)にあり、標高八三二・五メートルで一名「千丈ヶ嶽」ともいう。一方、京都市西京区大枝沓掛町と亀岡市篠町王子との間(山

城国と丹波国との間)をいう老ノ坂にも四七〇メートルの大枝山があり、『角川日本地名大辞典 26』の「京都府 下巻」の「地誌編 西京区」に「おおえくつかけちよう 大枝沓掛町」の項があつて、小式部内侍の「大江山」の歌にいう「大江山」は、「当町の北付近ともいわれる。」と記している。これに対し、『日本歴史地名大系 26』の『京都府の地名』には、「加佐郡」の中に「大江山」の項があつて詳しく解説され、

なお大江山は、古くは「万葉集」巻一二に

丹波道の大江の山のさね葛絶えむの心我が思はなくに

と詠まれる。しかし「丹波道」は丹波の国に行く道という意味なので、この「大江の山」は山城から丹波に至る峠、老ノ坂すなわち大枝山をさすとする説が有力である。

と説き、さらに、小式部内侍の「大江山」の歌その他を引いて、これらの大江山が千丈ヶ嶽か大枝山か必ずしも明確でないが、生野(現福知山市)と詠み合わせているものは千丈ヶ嶽であろう。

と記している。このように今日行われている歴史地名の専門書においてさえも、小式部内侍の「大江山」の歌の「大江山」の位置が明確に認識されていない実状である。また、金葉集の唯一の精緻な注釈書である正宗敦夫氏著『金葉和歌集講義』にも、

○大江山、幾野、何れも丹後の名所である。〔抄〕鈴木注、『八代集抄』の意。)に「師説大江山は丹波路の入口也。鳥羽の上に見ゆ

る也。(中略)幾野は丹波の奥也。」と云へり。大江山は丹波口の
大江山で、今の老坂と云ふ処であると云ふ。いく野はいづくか。
何分ただ名所を大よそによめるなり。大江山を越えて幾野を過
ぎて行くと云ふを、幾野と云ふ名にいくをもたせたのである。

(七七九頁)

と簡単に割り切つて記され、百人一首の古注・新注なども明解され
たものが少ない。また、「いくの」の地名についても、兵庫県朝来郡
生野(銀山)(但馬国)と考えるものがないではないが、前掲「角川日
本地名大辞典 26」の『京都府 上巻』に「いくの 生野(福知山
市)」、『京都府 下巻』の「地誌編 福知山市」に「生野の道」「い
弘くの 生野」、『日本歴史地名大系 26』の『京都府の地名』の「福
知山市」に、「生野村(福知山市字生野)」「生野」、の項があつて、い
ずれも小式部内侍の「大江山」の歌と関係のあることに触れている。
右の歴史地名の専門書は、『角川日本地名大辞典 26』が昭和五十七
年七月八日に、『日本歴史地名大系 26』が昭和五十六年三月十三日
に、それぞれ刊行された書であるが、それよりも二十数年以前に馬
淵一夫氏が「大江山と生野」(『解釈』昭和三年九月号)を発表されて
いて、雑誌の性質上、長論文ではないけれども、きわめて緻密な論
考であり、その結論とされる、大江町・加悦町の境にある「大江山」
説、福知山市内(丹波国)「生野」説はすでに動かすべからざる卓説
として、高く評価されなければならないであらう。殊に、論文末尾
に付された地図は重宝で、説得力に富むものと思われるが、このよ

うな確たる説がその後、学者間に取り上げられることが少ないのは
まことに惜しむべきである。もつとも、馬淵氏も付言されているよ
うに、同様の説が、簡単なが、すでに近世において行われていた
ことも、参考までに掲げておこう。一つは、伴蒿蹊の『閑田耕筆』
(『日本随筆大成』第一期卷九所収本。馬淵氏の論文に「閑田随筆」とあ
るのは誤りである。)[「巻之一 天地部」に、

大江山二所あり。山城、丹波の界檜原の西に、俗老の坂と称ふ
るもの、大江山の坂を誤るなり。和名抄乙訓郡大江とあり。(中
略)又丹波、丹後の界なるものは、(中略)今千丈カ嶽といふ。

「大江山いくの、道の遠ければと、小式部内侍のよみしは、其
母和泉式部、保昌朝臣にたくひて、丹後に有しほどなれば、そ
なたなること知べし。(五一七頁)

とあり、また、他の一つは、山岡浚明の『類聚名物考』(馬淵氏の論
文に「類聚名義考」とあるのは誤りである。)第二冊 地理部の「巻五十
六 地理部第三 里」に、

生野里 いくののさと 丹波(天田郡)●生野に同し(中略)小式部か
歌に大江山いく野の道の遠ければといへるも此所なり(下略)
(二二頁)

とある。なお、「大江山いくののみち」は、たとえば、契沖の『百人
一首改観抄』(『契沖全集』第九卷所収)に、

哥の心は、都より丹後国へ下るには、丹波路を經るなり。丹波
の国に大江山あり。幾野あり。大江といへは大きな山と聞え、

いく野といへはいくばく遠き野と」聞ゆるなり。(七二八・七二九頁)

と記され、尾崎雅嘉の『百人一首一夕話』(岩波文庫本)上の巻の五「小式部内侍」にも、

この歌の心は母の往きて居らるゝ丹後国へ下るには、丹波路の大江山・幾野などといふ所ありて、その名さへ大きな山幾ばくとも知れぬ野といふやうなる所にて、(三八四頁)

とあるから、「大江山」の「大」には、「大きく高い」の意も含まれ、また、「生野」の「生」に「行く」が掛けられているほか、「幾多」の意をも含まれていると考えられることにより、全体の意は、大きく高い大江山に行くべき広野続きの生野の道、ではないかと思われる。

「まだふみも見ず天の橋立」は、まだ母の和泉式部からの手紙も見ていないし、天の橋立を踏み通りもしていない、の意で、「ふみ」は、手紙の意の「文」と「天の橋立」の「橋」の縁語である「踏み」とが掛けられている。「天の橋立」は、京都府宮津市(丹後国)江尻から南岸の文珠まで細長く突き出た砂嘴で、長さは三キロメートル余あり、松島(現宮城県宮城郡松島町)・宮島(現広島県佐伯郡宮島町)とともに日本三景となっている名勝で、古来、歌枕としても名高い。「天の橋立」の起源は、風土記(日本古典文学大系本)の「逸文 丹後国」に見える次の「天橋立」の文章に記されている。

丹 後の国の風土記に曰はく、与謝の郡郡家の東北の隅の

方に速石の里あり。此の里の海に長く大きな前あり。長さは一千二百廿九丈、広さは或る所は九丈以下、或る所は十丈以上、廿丈以下なり。先を天の橋立と名づけ、後を久志の浜と名づく。然云ふは、国生みましし大神、伊射奈藝命、天に通ひ行でまさむとして、椅を作り立てたまひき。故、天の橋立と云ひき。神の御寝ませる間に仕れ伏しき。仍ち久志備ますことを恠みたまひき。故、久志備の浜と云ひき。此を中間に久志と云へり。此より東の海を与謝の海と云ひ、西の海を阿蘇の海と云ふ。是の二面の海に、雑の魚貝等住めり。但、蛤は乏少し。(四七〇頁)

さて、一応、金葉集の詞書をも検討しておきたい。

保昌は、尊卑分脈によると、藤原致忠の息子で、母は元明親王女。その右注に「昇殿 肥前守正四下 大和守丹後守 摂津守右馬頭 哥人 勇士武略之長」、左注に「母元明親王女 長元九一卒^{九十} 名人也」とあり、この没年の年齢から逆算すると、天徳二年(九五八)の出生となる。なお、没年月は、「勅撰作者部類」(山岸徳平氏編『八代集全註』第三巻所収)に「長元九年九月卒」(一〇三六)とある。保昌の歌は後拾遺集に一首入集されているが、歌人である半面、尊卑分脈の注記のとおり武名の高い人であったらしいことは、今昔物語集(日本古典文学全集本)巻第二十五「藤原保昌朝臣值盗人袴垂 語第七」(宇治拾遺物語巻第二「十 袴垂保昌にあふ事」にも同じ内容の話が見える。)や十訓抄(石橋尚宝氏著「十訓抄詳解」)第三「不可悔三人倫事」一一に「此の黨は、頼信・保昌・維衡・致頼とて、

世に勝れたる四人の武士なり。」(一四七頁)と見えることによつても首肯し得るのである。保昌の官歴については、上村悦子氏の「和泉式部考」(『王朝女流作家の研究』所収)の中に言及され、末尾には「藤原保昌官歴一覽」が付載されている(九九頁)ので、便宜上その主要なものを抄出し、西暦年号や保昌の年齢を補うと、寛弘二年(一〇〇五、四十八歳)八月十三日、肥後守(御堂関白記)、寛弘八年(一〇一五、五十四歳)八月十一日、従四位下(小右記二)、長和二年(一〇一三、五十六歳)四月十五日、左馬権頭(御堂関白記)、同十六日、兼大和守(本朝世紀)、治安三年(一〇二三、六十六歳)正月廿三日、丹後守(東山御文庫小右記)(大日本史)、万寿二年(一〇二五、六十八歳)九月十三日、大和守(小右記七)、長元七年(一〇三四、七十七歳)十一月、摂津守(大日本史)、となる。そして上村氏は、和泉式部と保昌との結婚時に関する従来の説を再検討され、二人の結婚は寛弘八年(一〇一三)か長和元年(一〇一四)ごろで、和泉式部の三十四歳から三十五・六歳のころと推定されるとともに、保昌の丹後守となっていた期間は治安三年(一〇二三)を含めた前後四年、和泉式部の丹後国下向は寛仁四年(一〇二〇)秋か治安元年(一〇二二)秋とされた。これらの説に従うならば、寛弘八年(一〇一四)か長和元年(一〇一四)、保昌が五十四・五歳の時に約二十歳年少の和泉式部と結婚したことになり、金葉集の詞書にある「和泉式部保昌にぐして丹後にはべりけるころ」とは、寛仁四年(一〇二〇)か治安元年(一〇二二)かの年(和泉式部四十五歳くらいか)以降、万寿二年(一〇二五)ごろ(和

泉式部五十歳くらいか)までの間ということになるであろう。ところで、万寿二年(一〇二五)といえ、冒頭に述べたごとく、その十一月に小式部内侍が二十六・七・八歳ぐらいで病没している。また、定頼の年齢については、上村氏はその出生年を「長徳元年又は長徳二年」とされ、それに基づいて、小式部内侍に戯れた時を「二十五歳乃至二十六歳」と計算されている(八九頁)が、前述のように確かなことはわからないけれども、万寿二年(一〇二五)には三十歳前後であつたらうか。したがって、小式部内侍の「大江山」の歌は、少なくとも彼女の病没した万寿二年(一〇二五)十一月より数年前までの間に詠まれたものと考えられないだろうか。森本元子氏(『小式部内侍』(『国文学解釈と教材の研究』昭和三四年三月)は、小式部内侍のこの歌を詠んだ時を「かりに長和四、五年とすれば、小式部は十五、六歳だつたはず」といわれたが、少し年代が早すぎるようである。「みやこに歌合侍りけるに、」については、どの歌合をさすかはっきりしないが、萩谷朴氏編著『平安朝歌合大成』第三卷所収「一一八」[寛仁末治安頃]或所歌合」に詳細な「考証」があり、そこには、まず、金葉集の右の詞書の「歌合」の成立下限を小式部内侍の病没した万寿二年(一〇二五)以前とされ、次に、小右記万寿二年(一〇二五)二月一日条および御堂関白記長和二年(一〇一三)四月十五日条の記録によつて、「万寿二年正月以前長和二年四月十五日以後の或時期に、保昌が左馬頭にして丹後守を兼ねたものであ」(七四九頁)り、さらに、「保昌の丹後赴任、従つて、この歌合の成立は、寛仁三・四

年治安一・二・三年の間に限定されるのではないかと思われる。」(七四九頁)と述べられている。ただ、保昌の丹後守となっていた期間は、先の上村氏説によって、萩谷氏のいわれる「長和二年四月十五日以後」を「治安三年(一〇二三)を含めた前後四年」と訂正する方が適当と思われるが、「和泉式部保昌にぐして丹後にはべりけるころ」すなわち「寛仁四年(一〇二〇)か治安元年(一〇二二)かの年以降、万寿二年(一〇二五)ごろまでの間」を考慮すると、萩谷氏説の、「歌合」の成立期である「寛仁三・四年治安一・二・三年の間」は、大体、穏当な説と見なしてよいであろう。なお、萩谷氏は、この「歌合」は「或は伊勢大輔集にいう歌合(一一九)〈鈴木注、「治安万寿頃」或所歌合〉がこれと同一の史実を指すものであるかも知れないが、全く立証の術もないことである。」(七四九頁)ともいわれ、また、袋草紙(後述する。)に「長元歟」とあることにつき、「或は長元八年の賀陽院水閣歌合を念頭においての発言であるかも知れないが、それは既に小式部内侍の卒去年時よりも下ったことで、史実を誤ったものといわねばならない。」(七四九頁)と付言されているのは全く同感で、上村氏(前掲著書)もこれに触れ、「之は小式部の没年後となり問題とならない。」(八九頁)と述べておられる。

ここにおいて、小式部内侍の「大江山」の歌は、あなた(定頼をさす)は、「丹後の国にいるあなたの母上のもとへお使いを遣わして、あなたの参加する予定の歌合せのために、その母上に代作してもらった歌を、お使いの人に届けてもらったか。」などとおっしゃいます

が、母のいる丹後の国へ行くのには、都から大きく高い大江山を越えて行くべき広野続きの生野の道を通らねばなりません、その道が遠いので、私はまだ母からの手紙も見えていませんし、丹後の国にある天の橋立を踏んでみたこともありません。だから、母に歌の代作をしてもらうなどと疑わないで下さい。の意となるであろう。

この歌は、古来、当意即妙の歌として有名であり、また、一首の中に「大江山」「生野」「天の橋立」と、丹後国の名所が三箇所も詠みこまれ、縁語・掛詞を用いた技巧的・知的な歌となっているほか、「天の橋立」という体言止で余韻・余情を残し、しかも、それは、初句の「大江山」という「山」に対照する「海」に関する言葉として、第五句に据えている点、まことに周到な詠み方である。定頼が小式部内侍に詠みかけられた時の状況も、前掲の多くの作品に記されて説話化しているが、とりあえず俊頼髓脳(『日本歌学大系』第一巻所収本)と袋草紙(『日本歌学大系』第二巻所収本)に見える記事を掲げておく。俊頼髓脳には、

大江山生野のさとの遠ければふみもまだみず天の橋立

是は小式部の内侍と云へる人の歌なり。ことのおこりは小式部の内侍は和泉式部がむすめなり。親の式部が、保昌がめにて丹後にくんだりたりける程に、都に歌合の有りけるに小式部の内侍歌よみにとられてよみける程に、四条中納言定頼といへるは、四条大納言公任の子なり。其人のたはぶれて、小式部の内侍の有りけるに、丹後へつかはしけむ人は帰りまうできにけむや、

いかに心もとなくおぼすらむとねたがらせむと申しかけて立ちければ、内侍御簾よりなから出でゝわづかに直衣の袖をひかへて、この歌をよみかければ、いかにかかるやうはあるとて、つゐて此歌のかへしせむとて暫しは思ひけれど、え思ひえざりければ、ひきはりにげにけり。是を思へば、心とくよめるもめでたし。(二一六頁)

とあり、袋草紙上巻「一、置_二白紙作法」には、

有_二歌合_一之此、長元歟、小式部内侍入_三歌人_一之時、母和泉式部為_二保昌妻_一在_二丹後国_一。定頼卿小式部内侍ガ局前ニ立寄テ戯テ云、いかに丹後へ人は遣候や、未_二帰参_一歟ト云て起時、小式部取_二直衣袖_一云、

大江山生野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

定頼卿引やり逃と云々。(八頁)

と見える。

「をりにつけては、」は、その時に応じての機智に富んだすばやい返歌としては、の意。「いとめでたかりけるとこそ」は、まことに結構であったことだと、の意で、俊頼髓脳に記す「心とくよめるもめでたし。」の批評と同一である。過去の助動詞「けり」の連体形「ける」の下に名詞「こと」を補って解釈すればわかりやすい。「おしはかるれ。」は、自然と推察せられる、の意。「るれ」は、自発の助動詞「る」の已然形で、上の係助詞「こそ」の結びとなっている。

〔通釈〕

また、定頼の中納言に、「小式部内侍ガ」

大江山いくののみちの遠ければまだふみも見ず天の橋立(「アナタハ」丹後ノ国ニイルアナタノ母上(和泉式部)ノモトヘオ使イラ遣ワシテ、アナタノ参加スル予定ノ歌合セノタメニ、ソノ母上ニ代作シテモラッタ歌ヲ、オ使イノ人ニ届ケテモラッタカ。」「ナドトオツシャイマスガ、母ノイル丹後ノ国ヘ行クノニハ、都カラ」大きく高い大江山を越えて行くべき広野続きの生野の道「ヲ通ラネバナリマセンガ、ソノ道」が遠いので、「私ハ」まだ「母カラノ」手紙も見えていませんし、「丹後ノ国ニアル」天の橋立を踏んで見たこともありません。「ダカラ、母ニ歌ノ代作ヲシテモラウナドト疑ワナイデクダサイ。」)

と詠みかけていたことなども、「ソノ」時に応じての「機智ニ富ンダスバヤイ」返歌としては、まことに結構であったことだと自然と推察せられる。